

いなかおか

東京都世田谷区歯科医師会会報
<http://www.setagaya-da.or.jp/>

Ⅱ

2004

No.147





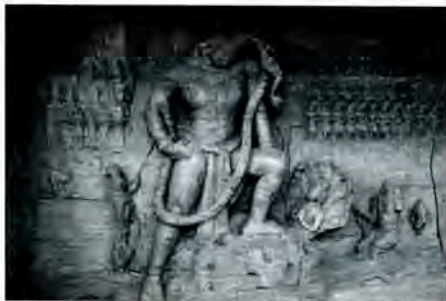
東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XV

下馬部会 斎藤 賢一

今回は「猪をめぐる冒険」、すなわち猪を探してインドを駆け回ったお話をいたします。この猪とは野猪（VARAHAヴァラーハ）の彫刻のことで、ヒンドゥー教のヴィシュヌ神の化身（最高神が生類を救済するために人間や動物の姿をとって現れたもの）の一つであります。ある日、インド美術の本をめくっていた時、この写真が目に焼き付いて、なにか運命的な出会いを感じ、いつかこのヴァラーハの彫刻の前に立つだろうと確信いたしました。写真は2枚あり、一枚は廃墟の中に大きな猪の彫像があり、体全体に細かい彫刻が施されたもの。もう一枚は頭だけが猪で首から下は人間のもの（猪頭人身）で、いずれも製作は5世紀後半、場所はエラン（ERAN）とかかれてありました。更に調べてみますと、このエランの近くにあるウダヤギリと言う石窟に、さらに古い5世紀前半のヴァラーハの浮き彫り彫刻があることがわかりました。5世紀という年代はグプタ朝盛期で、その美術は澁刺とした生命感と均整の取れた人体表現を確立して、インド美術史上画期的な古典様式を作り出した時代でした。

まずエランという場所を地図で探しても載っていません。マディヤプラディッシュ州の仏塔で有名なサンチーのあるボーパルと比較的大きな町サガールの間あたりにあるようなので、現地を探すとしてみずはデリーからボーパルまで飛行機に乗り、サンチーを見学して周辺のヒンドゥー遺跡を巡りながらウダヤギリへ行きました。ウダヤギリは5世紀に建立され、20の石窟からなり、第5窟にヴァラーハの浮き彫り彫刻があります(写-1)。



写-1 「野猪の化身」ウダヤギリ

野猪の化身神話は、「ある時大地の全てが魔神ヒラニヤークシャによって海底に沈められたことがあった。困惑したブラフマー神はヴィシュヌ神に相談した。すると彼の鼻の穴から1匹の小さな猪が飛び出した。それは見る見るうちに巨大な山のような大きさになった。その巨大な猪（ヴァラーハ）は海に飛び込むと、大地を牙に引っかけて持ち上げてきた。ヒラニヤークシャはそれを妨げようとするがヴァラーハはあっと言う間にこの魔神を殺してしまった。そして大地を解放し、その結果大地は再び水の上に浮かんだ」と言うものです。第5窟の壁面を見ると中央に巨大な猪頭人身のヴァラーハが立ち、左足でとぐろを巻いたナーガ（蛇）を踏みつけています。このナーガが魔神ヒラニヤークシャです。ヴァラーハは牙で小さな女性を持ち上げています。この女性が大地の女神プリトヴィで、大地を救済したことを表しています。背後の壁面には線文様が水として刻まれており、4段に並列する多数の神々や仙者、天人はヴァラーハの英雄的行為を讃えています。

さてエランですがなかなか見つかりません。小さな村を通る度に村人に聞くのですが、インド人の常として一人に聞くと知らないと言っていて正直に答えてくれるのですが、茶店など人が集まるところで聞くと中に必ず2、3人知ったかぶった人が勝手に道順をおしえてくれるので困ります。2時間ほど探しましたが見つかりません。仕方なくまた茶店で聞いたところ、案の定1人エランへ行ったことがあると言う人がおりました地図を書いてくれました。半信半疑で行って見たところ次第に道が無くなり、獣道のような所をさらに30分ほど進みました。私は不安になり、もうあきらめて引き返そうとガイドに言っても、ガイドはむきになってもう少し行ってみると言い張ります。もう道もなくなりあきらめ果てたとき、突然ガイドが車の窓の外を指しました。小さな灌木の生えている平らな土地の先にあの写真の猪の姿がおぼろげに見えました(写-2)。道がないので最短距離を通って近づきます。まさにあの猪です。周囲は金網で覆われた廃墟の中にそれはあり



写-2 「野猪の化身 遠望」 エラン



写-3 「野猪の化身」 エラン

ました。ヴァラーハは猪の姿で、牙にはあの大地の女神プリトヴィを引っ掛け、体面にはウダヤギリの壁面に彫られていた神々が余すところ無く彫刻されています(写-3)。現在エランの村は人口数百人、地図にも載っていない小さな村ですが、1500年前にはこの地方一帯はグプタ朝の重要な町でした。この廃墟もとても立派な寺院であったに違いありません。

もう一枚のヴァラーハの写真ですが、エランと書いてありましたが、エラン出土で、現在は近くのサガールの町にあるサガル大学博物館に保存されていることがわかりました。サガールの町は大きな町でその名の通り湖を囲んで発展しており、サガル大学は町を見おろす丘の上に建つ立派な大学で、その一角に博物館があります。はたして入口にその彫像はありました

(写-4)。始めはレプリカかと思いました。なぜなら写真では丘の上の野外に立っており、白黒写真でしたので勝手にグレーの砂岩と思いきり込んでいたからです。実際はとても綺麗なピンク色の赤色砂岩で出来ており、

写-4 「野猪の化身」
サガル

薄暗い入口におかれていました。猪頭人身の彫像で肉感的です。大地の女神プリトヴィもとても良い出来です。野外の太陽の下で見られなかったのが残念です。

時代は経りますが、ここから200kmの所にかの有名なカジュラホ遺跡群があります。そしてここにエランと同じ猪の体をしたヴァラーハの彫像があります(写-5)。



写-5 「野猪の化身」カジュラホ

猪の体をしたヴァラーハはめずらしく、この2体しか私は知りません。カジュラホのヴァラーハはオープンエアになった堂に安置され、11世紀頃の製作です。エランと同じ様に体面を674の神々でびっしり彫刻されていますが、牙には大地の女神が引っかかっておりません。左前足の前に上部が欠けてしまった女性の足が残っていますが、おそらくこれが大地の女神でヴァラーハの首に腕を掛けていたのではないかと思います(写-6)。



写-6 「野猪の化身 足元」カジュラホ

また、足の間に彫刻された蛇は、シェーシャ龍(アナンタ龍)なのかヒラニヤークシャを表している蛇なのか良くわかりません。

さらに猪をめぐる旅は続きます。次の目的地は南インド、カルナータカ州のバーダーミーです。交通の便が悪く、ゴアかハイドラバードの空港から車で8時間以上かかります。バーダーミーの町も現在は小さな町ですが、6世紀の中頃より200年間チャールキヤ朝の都として栄えたところで、ここに4つの窟からなる石

窟寺院があります。第2、3窟にヴァラーハの浮き彫り彫刻がありますが、第3窟のものが傑作です

(写-7)。猪頭人身4腕で左足でヒラニヤークシャを踏みつけて、4腕の一つに大地の女神を抱えており、他の腕にはヴィシュヌの持ち物、チャクラ、法螺貝を持っております。6世紀末の製作で躍動感にあふれています。他の窟にも重要な彫刻がありますが、バーダーミーの石窟の特色は窟を支える柱の上部に設けられた男女像です(写-8)。

猪を求めてさらに南下し、タミルナードゥ州のマハーバリプラムにある石窟へ行きました。マハーバリプラムはマドラスの飛行場から車で南に1時間行ったところにあります。6世紀末から9世紀末まで栄えたパッラヴァ朝の都カンチープラムの港町で東西交易の拠点として重要でした。ここに

7世紀中頃に建立された多くの石窟寺院(マンダパ)が点在しています。その中の一つ、その名の通りヴァラーハマンダパに見事な浮き彫り彫刻があります(写-9)。マンダパの入口はパッラヴァ朝特有のうづくまる獅子の柱に支えられ(写-10)、内部にあるヴァラーハの浮き彫りは、すらりとした細い肢体に軽快でリズムカルな手法を用いてパッラヴァ朝の特徴を良く表しています。猪頭人身4腕で頭にはヴィシュヌ神の象徴である王冠をかぶり、両腕で大地の女神プリトヴィを抱え、他の腕にはチャクラと法螺貝を持っております。左足でヒラニヤークシャを踏みつけ、周囲の神々は合掌してヴァラーハを讃えております。ヴァラーハの大きさは、他の神々とさほど変わらず、プリトヴィもまるで少女の様に描かれています。ここでは今まで見てきた威圧感がありません。



写-7 「野猪の化身」
バーダーミー



写-8 「男女像」
バーダーミー



写-9 「野猪の化身」
マハーバリプラム



写-10 「ヴァラーハマンダパ 入口」
マハーバリプラム

広大なインド亜大陸をヴァラーハを求めて猪のごとく駆けめぐりました。この神話のモチーフはインド中、至る所で寺院の壁面を飾っておりますが、美術的に優れたものは今回訪れた寺院のものであります。以前お話ししましたが、神々にはそれぞれ神妃がおります。ヴィシュヌの化身であるヴァラーハも例外ではありません。ヴァラーヒーと言い、夫と同じ野猪の顔を持ち、大きな腹をして水牛に乗って、魚、索縄、鉤を持っています。このヴァラーヒーを祀ってある寺院を探し、やっとオリッサ州の州都ブヴァネーシュヴァルから車で1時間ほどのチャウラーシ村にヴァラーヒーを本尊とするヴァラーヒー寺院があることがわかり、空路ブヴァネーシュヴァルを目指しました。この寺院は10世紀に建立された寺院で、他のオリッサ寺院のように高塔化になる前の形態をしており、壁面の彫刻も素晴らしい瀟洒な寺院で独特の雰囲気が漂います(写-11)。本尊のヴァラーヒーは野猪の顔を持ち、大きな腹で水牛に乗っています。持物は右手に魚、左手にはお椀を持っております(写-12)。この本尊は建立時のものか、後代持ち込まれたものかわかりません。

以上でインドの旅は終わりです。何が私をこの旅に駆り立てたのかは解りません。美術書にあった2枚の写真がインドに導いたことは確かです。インド亜大陸

はとても広く、北と南、さらに西と東では人種、言語、食べ物、文化など異なります。このバラバラな文化を統一し、インドを国として一つにしているものがヒンドゥー教ではないでしょうか。今回そのヒンドゥー教神話の一つ、野猪の化身ヴァラーハに導かれてそんなことを考えました。

最後にインド文化の洗礼を受けた東南アジアでヴァラーハを探しましたが、残念ながらどこにも見つけることが出来ませんでした。ただ一つ、カンボジアのアンコール遺跡で猪の彫刻を見つけました。アンコール遺跡群の中で一番美しいと言われる10世紀に建立されたバンティアイスレイ寺院です。アンコール寺院のほとんどが歴代王の建立によるものですが、この寺院はジャヤヴァルマン5世の王師を勤めていたヤジュニャヴァラーハというバラモンが個人的に建てたと言われています。その名の通り自分を表す野猪を経蔵のまぐさ(LINTEL)の中にとっても控えめに彫刻させました(写-13)。旧友に会ったような気がして一人見とれる私の体をインドからの風が吹き抜けたような熱帯の昼下がりでした。



写-11「ヴァラーヒー寺院」
チャウラーシ



写-12「ヴァラーヒー」
チャウラーシ



写-13「野猪のLINTEL」 バンティアイスレイ